

トップアスリートの外傷・障害に関する新聞報道の医学的正確性

トップスポーツマネジメントコース

5022A301-1 安間 久芳

研究指導教員：平田竹男 教授

1. 背景

新聞はスポーツとの関係も深く、医学的内容も含めた情報の信頼度が近年でも最も高い報道機関であるとの調査結果もある。しかし、新聞、インターネットなどで報道されるスポーツ外傷・障害の記事の中には、専門的内容が理解しづらいものや正確性に疑問が残るものも時に存在する。例えば、足の骨の中に「舟状骨」という骨があるが、この骨の正しい読み方は「しゅうじょうこつ」であるにもかかわらず、報道記事中の図には「せんじょうこつ」とふりがながふられていたことがあった。

整形外科医としての著者の経験からもスポーツ報道でスポーツ選手のケガについて正確で適切な情報が伝わらないことは、その記事が読者、特に競技関係者に誤解を招く恐れがあり、新たな事故発生や誤った知識の流布など、更なる問題の発生につながる恐れがあると感じている。また、報道を行う側の信頼性に影響する可能性もある。

スポーツ報道における医学専門的な内容について、さらに理解しやすく正確な情報提供を行うことができれば、報道利用者側に有用なものになるのではないかと考えた。

ケガや病気に関する報道についての研究は週刊誌でのがん報道に関するもの(Nagata, 2013)、新型コロナウイルスに関するもの(税所, 2021)など、がんや内科疾患を中心に見られるが、スポーツ外傷・障害に関する報道についての情報は十分でない。

2. 目的

本研究の目的は、トップアスリートの外傷・障害に関する新聞報道の医学的正確性が損なわれる原因を究明し改善策を提案することである。

3. 対象と方法

【研究 1】過去に報道された新聞、インターネット記事のうち、(1)大リーグ大谷翔平選手の手術および外傷・障害に関する報道(2)バドミントン廣田彩花選手の2021年五輪直前のケガに関する報道

を対象にスポーツ新聞4紙(報知、サンケイスポーツ、スポーツニッポン、日刊)と一般新聞3紙(朝日、毎日、読売)各紙の報道内容の比較をした。記事の校閲には、「医学用語辞典(医学書院)」、「標準整形外科学(医学書院)」、「広辞苑(岩波書店)」の各最新版を使用した。

【研究 2】2022年サッカーワールドカップカタール大会における大会前、大会中のケガに関する報道について、研究1と同様に7紙を対象に、報道内容を比較分析した。

【研究 3】これまでにスポーツ外傷等に関する記事を執筆した経験がある、新聞社や出版社などの記者8名を対象に、インタビュー調査を実施した。主なインタビュー内容は(1)スポーツ報道制作の現状(2)医学的な内容を必要とする記事の作成方法(3)問題解決方法などである。

4. 結果

【研究 1】

1) 大谷選手に関する報道

大谷選手の外傷・障害についての記事は大きく2つに分けられた。

二分膝蓋骨に対する手術の記事(2019年9月13日頃の報道)は、スポーツ紙では4紙が一般紙では3紙が報道していた。本疾患は「先天性」とは考えられない病因にもかかわらず、全7紙の記事で「先天性」あるいは「先天的」と記述されていた。また、1紙で二分膝蓋骨を「二部膝蓋骨」と誤記していた。

次に、あるスポーツ紙が記載した大谷選手の故障歴(2019年9月14日の報道)で取り上げられた過去3つの外傷・障害について、他の6紙も過去に記事にしていたものもあったが、医学用語の誤りが認められた。「坐骨結節」骨端線損傷は7紙中4紙が過去に記事にしており、記載していた文言が「座骨」1紙、「坐骨結節」1紙、「座骨関節」2紙であった。「大腿二頭筋」肉離れは7紙が記事にしており、「太腿」と記述していた記事が2社であった。「三角骨」

に関する記事は7紙にみられ「三角骨骨棘」が1紙、骨棘の読み仮名を「こっきょく」と記述した記事が2紙あった(表1)。

表1 大谷選手記事中の文言

正	誤
二分膝蓋骨	二部膝蓋骨
坐骨	座骨
坐骨結節	座骨関節
大腿二頭筋	太腿二頭筋
三角骨	三角骨骨棘
こっきょく	こっきょく

2) 廣田選手に関する報道

廣田選手の前十字靭帯損傷に関する記事では、全紙とも疾患名は正確に伝えていた。一方で通常は手術すべき疾患であるが、保存療法という特別な選択であったことに深く言及したのは1紙のみであった。

【研究2】2022年サッカーワールドカップでは大会前から代表候補選手の故障が23件報道あった。そのうち、医学用語の誤り6件、不明瞭あるいは不統一な診断名が4件、患側の左右間違いが2件あった。

【研究3】インタビュー調査結果

新聞社などの報道機関内に医学的内容について相談する専門家が乏しいことが判明した。新聞は外傷が発生した翌朝に発行する速報性が求められるため、記事作成に十分な時間が取れない事情もあり、専門家に取材できない場合はチーム広報への取材やインターネット検索などの限られた方法で記事が作られていた。そのような事情のためか、電話やメール等で連絡がとりやすい医師がいれば助かるという意見の記者が8名中6名いた。医師と連絡を取り合った記者が困った経験として、「記事に色々口出ししてくる医師も困るんですが、ほったらかしの医師も信頼は低いです。」「完成記事の内容や報酬でうまくいかないこともあるんです。」「長い時間説明したがったり、できた記事をチェックしたがるとか色々あります。」などの意見があった。

5. 考察

スポーツ紙、一般紙におけるスポーツ外傷・障害についての報道には、誤った医学用語の使用や、疾患についての知識の誤りなど、誤情報を含んだ報道がなされている事が分かった。新聞に信頼をおく読者が、大谷選手の二分膝蓋骨が「先天性」であると

信じて、幼少期の子供に不安を持ったり、廣田選手のように前十字靭帯損傷でも努力すれば手術せずに試合に出られると考えて、半月損傷等を受傷するなどの問題につながる可能性もある。

記者へのインタビュー結果をふまえると、新聞等におけるスポーツ報道では速報性が求められており、記者が試合後など短時間で医学的内容を含んだ記事を作成する事に問題があると思われた。また、記事作成に協力が得られる専門家も限られている事も明らかになった。そのような事情が、スポーツ報道における医学的内容において不適切な記事が作られる原因と推察された。より良い医学的内容の報道を行うための方法の一つとして、連絡や相談が容易な医師等の専門家を確保する事が挙げられる。この問題を緩和するには、協力可能な専門家に積極的に相談できる記事作成の仕組みが必要である。

その実現手段を考えると以下のような選択肢が考えられる。

- ①新聞社内に医学的内容に対応する専門部門を作る。あるいは医師の顧問を作る。これが可能になれば、スポーツ部門以外や企画記事など社全体に医学知識の協力が得られる。
- ②競技団体の医科学委員会内にメディアからの問い合わせ対応部門を作る。競技に特化した専門的な情報も得られるほか、団体の広報にも利用できる。
- ③意志のある医師が医療報道の評論家として独立して活動する。一人の評論家が、多数の報道機関に貢献できる可能性がある。

医師との連携では、医師が完成記事についての確認や報酬について拘泥する傾向がある場合に障害になる可能性がある。報道機関の内情や記事作成に理解がある医師と、あらかじめ条件を決めて仕事をするか、報道機関内に記事作成の一社員として専門家を置くことも検討に値すると考える。

6. 結論

スポーツ選手の外傷・故障に詳しく、かつ十分な時間がない中で連絡や相談が容易な専門家の確保が、より良い報道につながると思われる。スポーツ選手の外傷に関する記事作成において、各記者と医療専門家が連携を持つことが、正確な報道、さらには国民のスポーツ外傷等に対するリテラシーの向上に貢献すると考えた。